

## さくら市議会全体研修会視察研修報告書

- 日 時 令和6年1月25日（木）
- 視察先 茨城県常総市

### 【常総市の概要】

常総市は人口6万人弱、茨城県の南西部に位置し、東京都心からの距離は約55キロです。市のほぼ中央に鬼怒川が、東部境界には小貝川が流れ、東部の低地部は広大な水田地帯となっています。

道路体系は、南北に国道294号、東西に国道354号が整備されており、周辺市町村と連絡する主要地方道や一般県道があります。さらに、市のほぼ中央部に「首都圏中央連絡自動車道（圏央道）」が東西に整備され、平成29年2月26日に常総ICが供用開始されています。

### 【研修内容】

茨城県常総市が公民連携で進める「アグリサイエンスバレー」によるまちづくりについて

アグリサイエンスバレーとは、食と農と健康をテーマとした産業団地であり、活力ある個性豊かな地域社会の形成、発展に寄与することを目的とした、常総市の新たな顔となる交流拠点です。

アグリサイエンスバレー構想は、圏央道常総IC供用計画を機に浮上してきました。IC周辺の農地45haを地権者の協力を得て集約、大区画化し、ここを「農地エリア」と「都市エリア」の二つのブロックに分けました。「農地エリア」では収益性に優れた先進モデルを展開する農業法人を誘致し、質の高い農産物の生産に従事してもらいます。その農作物を「都市エリア」で加工し、付加価値を付けた農産物を流通し、販売していきます。このようにアグリサイエンスバレーは、生産、加工、流通、販売が一体となって、地域で完結する農業の6次産業化を目指す産業団地であり、質の高い食品を提供するバリューチェーンを構築しています。

「都市エリア」には常総市が整備した「道の駅常総」や、民間集客施設「TSUTAYA BOOKSTORE」が立地しています。どちらも集客力が高く、視察で訪れた際も平日にもかかわらず、多くの人で賑わっていました。また「都市エリア」にはIC直近と言う地の利を生かした大規模物流拠点も整備され、流通の拠点としての機能を果たしています。さらに空中いちご園などの観光農園もあり、将来はイベント等を開催できる都市公園、温浴施設等もオープンして、交流拠点としての役割を担っていく予定です。



アグリサイエンスバレー構想の核となる「道の駅常総」は、市が整備した後、指定管理者によって運営されています。常総産、茨城産食材の魅力が溢れる直売所に加え、お食事処や専門店が並び、パン屋さんには長い行列が出来るほどの人気店でした。令和5年4月のオープン以来、多くの来場者が訪れ、大型連休中には7万人が来場。年間の来場者は100万人を超える賑わいを見せているそうです。

アグリサイエンスバレー構想は、常総IC供用開始をチャンスと捉えた常総市と民間企業がタッグを組んで進めてきました。平成25年の構想策定後は、地権者との話し合いを進め、翌年には実施計画が策定されました。そして平成27年には三者協定が締結され、農林協議を経て、平成30年は都市エリアの造成工事が開始されました。その後食品総合物流施設の操業を皮切りに、観光農園ゾーン、大規模施設園芸ゾーン、道の駅と整備が進んできました。

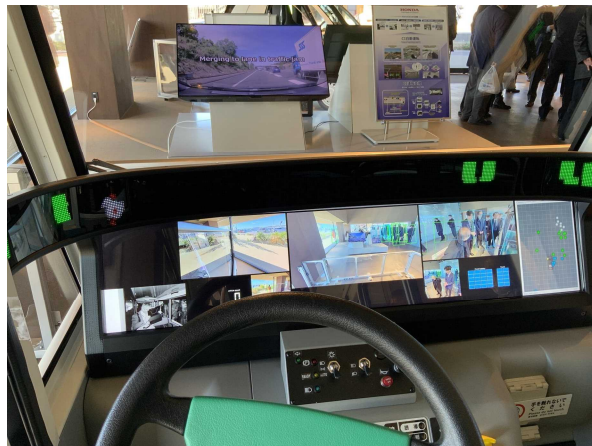
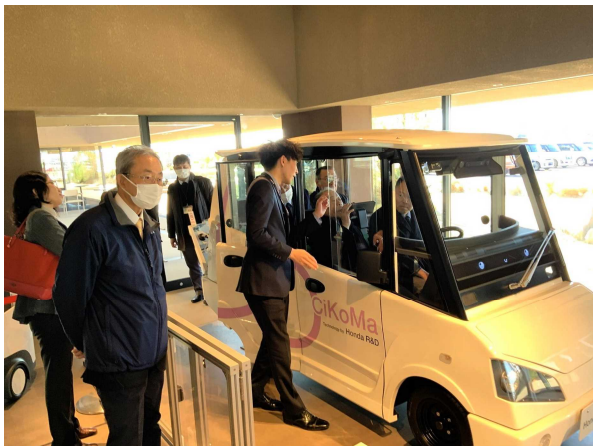
アグリサイエンスバレー事業が地域経済にもたらす波及効果は、大きく6点挙げられます。

- ① 3社の農業企業進出により、年間生産高約14億円
- ② 農業生産の年間生産高が稲作のみから約27倍増加
- ③ 魅力ある地域づくり創出と人口流出抑制
- ④ 新たな企業の立地参入及び「農」の新事業の拠点創出
- ⑤ 道の駅を中心に年間約100万人の来場者等、地域の関係人口の増加
- ⑥ 企業誘致による雇用創出約2,000人、税収増加約3億

その他にも、想定される効果ははかり知れません。

また研修では、道の駅に隣接した「TSUTAYA BOOKSTORE」の施設内に入居している、株式会社本田技術研究所も訪問しました。研究所はアグリサイエンスバレー内でマイクロモビリティの自動走行実証実験を行っており、実車等を見学させて

いただきました。近未来を感じる素晴らしい施設でした。



搭乗型マイクロモビリティ「CiKoMa (サイコマ)」

アグリサイエンスバレーはまだ完成途上です。事業完成は令和7年度以降を予定しているそうです。しかしすでに当初の目標を上回る集客と効果を上げ、今後も成長拡大を続ける事と思われまます。引き続き注目していきたいですね。

#### 【感想】

人口規模が当市とさほど変わらない常総市が、IC開設を大きなチャンスと捉えて、これほど大規模な事業を成功に導いた実行力は、本当に素晴らしいと感じました。

何より感銘を受けたのは、その不屈の精神です。常総市は平成27年9月の関東・東北豪雨により、鬼怒川、八間堀川の堤防決壊や溢水等が発生し、市域の約3分の1が浸水、住宅、農業・商業・工業、交通網などに甚大な被害を受けました。しかしアグリサイエンスバレー構想はそこで止まることなく、基幹産業である農業を核とした一日も早い復興に向けて、逆境をバネにして強力に事業を推進したそうです。復興と並行してこれだけの事業を実現するのは、並大抵の努力ではなかったと想像できます。関係者の皆様のご努力に深い敬意の念を表します。

当市としても、いつまでも先行自治体の背中を追うのではなく、先進事例を作り出せるよう成長しなければならない。そういった決意を強くする、実に有意義な研修でした。